

特定行為研修制度に関する研究の動向と課題

－活動と成果に注目して－

樋口佳耶¹、林千冬¹

¹神戸市看護大学

キーワード：特定行為に係る看護師の研修制度、特定行為、試行事業、文献検討

Trends and Challenges of Studies on the Training System for Nurses on the *Tokutei* Acts

Kaya Higuchi¹, Chifuyu Hayashi¹

¹Kobe City College of Nursing

Key Words: the Training System for Nurses on the *Tokutei* Acts, *Tokutei* Acts, trial projects, literature review

I. 緒言

2015 年 10 月 1 日から、特定行為に係る看護師の研修制度（以下、当該研修制度）が開始された。これは、看護師が手順書により行う特定行為を標準化することにより、今後の在宅医療等を支えていく看護師を計画的に養成していくことを目的としている（厚生労働省, 2020）。特定行為とは、「診療の補助であって、看護師が手順書により行う場合には、実践的な理解力、思考力及び判断力並びに高度かつ専門的な知識及び技能が特に必要とされるもの（厚生労働省, 2020）」であり、21 区分 38 行為が定められている。また、手順書とは、「医師又は歯科医師が看護師に診療の補助を行わせるためにその指示として作成する文書又は電磁的記録（厚生労働省, 2020）」である。

当該研修制度はチーム医療の観点から議論されてきたものの、そのきっかけとなったのは、2004 年に始まった新医師臨床研修制度を引き金として生じた医師不足対策である（野村, 2017）。そのため、当該研修制度についての議論が、「従来『診療の補助』の範囲に含まれない特定の医行為を安全に実施することに主眼が置かれ（日本看護学会協議会, 2011）」ており、「看護ケアの在り方と特定行為の関連性がほとんど議論されていない（看護未来塾世話人会, 2018）」といった指摘がなされている。さらに、当該研修制度開始前から、臨床現場では検査や

処置など診療の補助への偏重がみられていたことを踏まえ、「多くの看護師がそういった研修を受け特定行為を実施できるようになった時、療養上の世話は一体誰が行うことになるのか（阿保, 2015）」と危機感を示す者もいる。

一方、日本看護協会（2014）は、「『特定行為に係る看護師の研修制度』は、チーム医療を推進し、高齢社会において多様化する医療ニーズに応える看護師を育成するための制度である」と述べている。具体的には、医師から看護師へのタスク・シフティングのための施策の一つとして、当該研修制度の活用を推進すると表明している（日本看護協会, 2019）。

当該研修制度開始後、医療関連の学会やシンポジウム等で、特定行為に係る看護師の研修（以下、当該研修）を修了した看護師（以下、当該研修修了生）による活動報告等がなされるようになっていく。しかし、当該研修修了生の数は 2,887 人（厚生労働省, 2021a）と当初の目標である 10 万人を大きく下回っており、当該研修修了生の活動や成果の解明が十分行われているとはいえない。

そこで、本研究は、文献検討を行うことによって、当該研修修了生の活動や成果に関する研究の動向と課題を明らかにすることを目的とする。この結果から得られた知見は、今後、当該研修修了生の活動や成果についての研究を行うにあたっての示唆を得る一資料になると考える。

II. 研究方法

1. 文献検索の概要と対象文献の選定 (図 1)

医学中央雑誌 Ver.5を用いて原著論文に絞り、「特定行為に係る看護師の研修制度」、「特定行為」、「特定看護師」、「診療看護師」、「ナースプラクティショナー」をキーワードに、2021年3月に文献検索を行った。検索期間は、当該研修制度が開始された2015年以降とした。その結果、「特定行為に係る看護師の研修制度」では8件、「特定行為」では120件、「特定看護師」では50件、「診療看護師」では53件、「ナースプラクティショナー」では21件の文献を抽出した。これら252件から重複した120件を除外したところ、計132件となった。この際、表題、著者および論文の内容は同一であるが、掲載誌が異なる文献があった(増田ら,2018a; 増田ら,2018b)。その2件は重複とみなし、1件としてカウントした。

次に、132件の表題と要旨を読み、当該研修制度に直接関係のない85件と、当該研修修了生の活動や成果を明らかにすることを目的としていない27件を除外し、20件を選定した。

そして、20件の本文を精読し、事例報告および実践報告といった調査研究ではない7件と、調査研究ではあるが、目的や方法が明確に書かれていなかったり、それらの一貫性が不十分と考えた4件を除外し、最終的に9件を選定した。

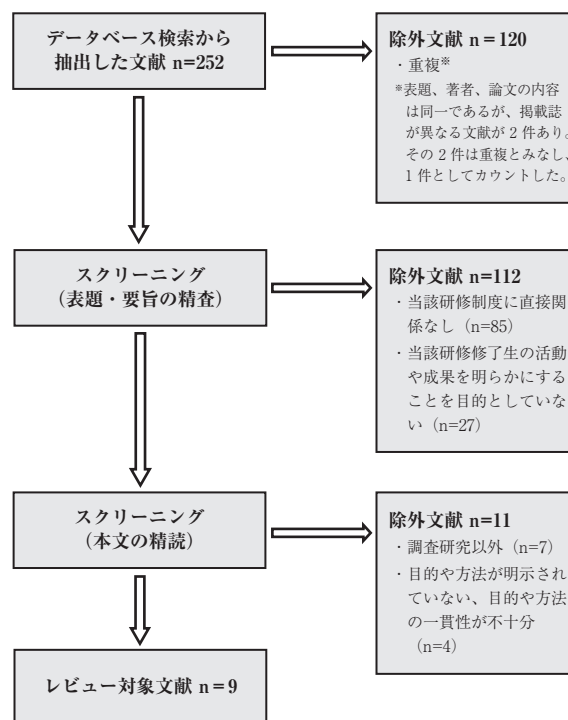
1) 当該研修に先立って行われた試行事業下で研修を受けたり、活動したりしていた者を対象とした研究について

9件の中には、当該研修制度の開始に先立って、2010年から実施された「特定看護師(仮称)養成調査試行事業」、2011年から実施された「特定看護師(仮称)業務試行事業」といった試行事業下で研修を受けたり、活動したりしていた者(以下、試行事業修了生)が含まれていた。これら試行事業は、特定行為の範囲や能力認証を受ける看護師の要件等を検討する際に必要となる情報や、実証的なデータを収集することを目的として行われたものである。したがって、試行事業修了生を対象とした研究からも、当該研修修了生の活動や成果に関する示唆を得ることができると考え、分析対象とした。

2) 日本 NP 教育大学院協議会が認定する「診療看護師」を対象とした研究について

日本 NP 教育大学院協議会(旧名称:日本 NP 協議会)が認定する「診療看護師(NP)」は、「本協議会が認める NP 教育課程を修了し、本協議会が実施する NP 資格認定試験に合格したもので、保健師助産師看護師法が定める特定行為を実施することができる看護師(日本 NP 教育大学院協議会)」と定義されている。そして、「日本 NP 教育大学院協議会の NP 教育課程認定規程に関する細則(日本 NP 教育大学院協議会,2019)」をみると、「保健師助産師看護師法第37条の2及び規則(省令)に定める特定行為区分のうち、活動領域で必要となる特定行為を実施することができる要件を満たすこと」が、NP 教育課程認定における審査の基準の一つに挙げられている。このことから、日本 NP 教育大学院協議会が認定する「診療看護師(NP)」は当該研修修了生であるといえるので、「診療看護師(NP)」を対象とした研究も分析対象とした。

図 1 文献の選定手順



2. 分析方法

分析対象とした9件それぞれの目的、方法、対象、結果の特徴と傾向を分析した。なお、分析に際しては、当該研修修了生の活動や成果に関する示唆を得るという視点から実施した。

Ⅲ. 結果

分析対象とした9件の概要を表1に示す。また、各文献における試行事業修了生あるいは当該研修修了生の表記と説明を、表2に整理した。

表1 分析対象とした9文献の概要（発表年順）

著者 (発表年)	表題	目的	方法	対象
川本ら (2015)	「特定看護師（仮称）業務試行事業」により養成された看護師が認知しているチーム医療の中での役割行動および他職種からの役割期待	「特定看護師（仮称）業務試行事業」により養成された看護師が認知しているチーム医療の中での役割行動と、他職種からの役割期待について明らかにする	質的研究 インタビューによる調査	特定看護師（仮称）
酒井ら (2015)	特定行為を実施する皮膚・排泄ケア認定看護師による安全の確保に関する行動の特徴	特定行為を実施する皮膚・排泄ケア認定看護師が、業務の中で、特定行為の安全をどのように確保し、チーム医療へどのように関与しているのかを明らかにする	質的研究 参加観察による調査	特定行為を実施する皮膚・排泄ケア認定看護師
村田ら (2017)	診療看護師による PICC 挿入と管理の成績 当院における PICC 281 例の検討	診療看護師が挿入・管理した末梢留置型中心静脈注射用カテーテル（PICC）の挿入について、安全性を含め成績を検討する	量的研究 データを後方視的に検討	診療看護師が挿入・管理した末梢留置型中心静脈注射用カテーテルに関するデータ
増田ら (2018a,b)	診療看護師が施行する末梢留置型中心静脈カテーテル（PICC）の実態調査	診療看護師が挿入した末梢留置型中心静脈注射用カテーテルについて、実施件数、挿入後のインシデント・アクシデントの報告について調査を行い、特に感染率、留置後の有害事象について実態を明らかにする	量的研究 データを後方視的に検討	診療看護師が挿入した末梢留置型中心静脈注射用カテーテルに関するデータ
里光ら (2019)	「特定行為に係る看護師」による気管カニューレの交換にみる成果	「特定行為に係る看護師」による気管カニューレの交換の成果を概観する	質的研究 インタビューによる調査	特定行為に係る看護師
杉山ら (2019)	国立高度医療研究センター／国立病院機構に勤務する特定行為研修修了者の活動実態とキャリア形成に関する研究	国立高度専門医療研究センターおよび国立病院機構に勤務する特定行為研修修了者の活動実態を明らかにし、キャリア形成への取り組みについて検討する	量的研究 質問紙調査	特定行為研修修了者
江角ら (2020)	特定行為研修修了者の活動による影響 施設管理者および協働する医師の捉え方より	特定行為研修修了者の活動による影響を、修了者が所属する施設管理者および修了者が協働している医師の捉え方を通して明らかにする	量的研究 質問紙調査	特定行為研修修了者が所属する施設管理者および協働している医師
杉山ら (2020)	国立高度専門医療研究センターおよび国立病院機構における特定行為研修修了者の活動実態と育成に関する研究	国立高度専門医療研究センターおよび国立病院機構に勤務する特定行為研修修了者の活動の詳細を明らかにし、キャリア支援のあり方を検討する	質的研究 インタビューによる調査	特定行為研修修了者
津野崎ら (2020)	外来治療センターにおける診療看護師介入による診療の効率化：前後比較研究	外来治療センターに診療看護師を配属することによる効果を検討する	量的研究 データを後方視的に検討	診療看護師配置前後の外来治療センター利用者に 関するデータ

表2 9文献における試行事業修了生あるいは当該研修修了生の表記および説明と、調査期間等（発表年順）

著者 (発表年)	試行事業修了生あるいは当該研修修了生の 各文献における表記および説明	調査期間等
川本ら (2015)	特定看護師（仮称） 「特定看護師（仮称）」について、「2011年度および2012年度、看護師特定行為・業務試行事業の対象看護師。本研究では仮称をとり、以後『特定看護師』として使用する」と説明されていた。そして、本研究の対象について、「看護師としての臨床経験が5年以上あり、『特定看護師（仮称）養成調査試行事業』において大学院修士課程を修了し、日本NP（nurse practitioner）協議会が実施するNP資格認定試験に合格した者」と説明されていた。	研究期間：2014年2月～2015年3月 データ収集期間：2014年6月～10月
酒井ら (2015)	特定行為を実施する皮膚・排泄ケア認定看護師（Tokutei Nurse、TN） 対象は、「2011～12年に日本看護協会特定看護師養成調査試行事業研修過程皮膚・排泄ケア分野を修了した」者と説明されていた。	記載なし
村田ら (2017)	診療看護師（Japanese nurse practitioner：JNP） 「診療看護師（Japanese nurse practitioner：JNP）」について、「2008年から先駆的に大学院修士課程でNP（nurse practitioner：ナースプラクティショナー）教育が開始され、2011年から修了生がJNP（Japanese nurse practitioner：診療看護師）として活動している」と説明されていた。	「2015年4月から2016年10月までの間にJNPが挿入・管理した281本のPICCを対象とした」と記載されていた。
増田ら (2018a,b)	診療看護師 「診療看護師」について、「大学院修士課程を修了し、日本NP協議会が実施した試験に合格した看護師」と説明されていた。	研究期間：2016年10月1日～2017年10月30日
里光ら (2019)	特定行為看護師 「特定行為に係る看護師」を、「特定行為看護師」と略して使用すると説明されていた。	データ収集期間：2017年3月～5月
杉山ら (2019)	特定行為研修修了者 対象者28人には、認定看護師が5人、「診療看護師」が6人含まれていたと記載されていた。	調査期間：2017年2月～2018年3月
江角ら (2020)	特定行為研修修了者	調査期間：2018年1月9日～2月13日
杉山ら (2020)	特定行為研修修了者 対象者5人のうち、3人は診療部所属で、大学院修士課程で当該研修を修了。残る2人は看護部所属で、認定看護師としての活動経験があると記載されていた。	調査期間：2018年10月～2019年3月
津野崎ら (2020)	診療看護師（Nurse Practitioner：NP） 「診療看護師（Nurse Practitioner：NP）」について、「5年以上の臨床経験のある看護師が大学院修士課程のNP養成コースを修了し、一般社団法人日本NP教育大学院協議会が実施するNP資格認定試験に合格した場合に使用される名称」と説明されていた。	「研究デザインは前後比較研究であり、対象は2017年4月1日～2018年1月31日の204日（配属前）、2018年4月1日～2019年1月31日の205日（配属後）の期間中に外来治療センターを利用した患者」と記載されていた。

9件中2件（川本ら,2015、酒井ら,2015）の研究では、試行事業修了生を対象としたと明記されていた。村田ら(2017)の研究ではそのように明記されていないものの、「2015年4月から2016年10月までの間にJNPが挿入・管理した281本のPICCを対象とした」との記載があり、当該研修制度が始まる2015年10月以前から、この研究の対象者が活動していたことが読みとれる。したがって、この研究の「診療看護師（JNP）」には試行事業修了生が含まれると考えた。残る6件中4件の対象者は、当該研修修了生であると明記されていた（里光ら,2019、杉山ら,2019、江角ら,2020、杉山ら,2020）。その他2件（増田ら,2018a；増田ら,2018b、津野崎ら,2020）の研究で

は、対象者が当該研修修了生であると明記はされていないものの、日本NP教育大学院協議会が認定する「診療看護師」であると記載されていたことから、当該研修修了生であると考えた。

以下では、9件の目的、方法、対象、結果について述べる。

1. 研究目的

試行事業修了生あるいは当該研修修了生が臨床現場でどのような実践を行い、どのような役割を果たしているのかといった、活動の実態を明らかにすることを目的とした研究が4件（川本ら,2015、酒井ら,2015、杉山ら,2019、

杉山ら,2020)、活動の評価を行うことを目的とした研究が5件(村田ら,2017、増田ら,2018a;増田ら,2018b、里光ら,2019、江角ら,2020、津野崎ら,2020)あった。

2. 研究方法

質的研究が4件(川本ら,2015、酒井ら,2015、里光ら,2019、杉山ら,2020)、量的研究が5件(村田ら,2017、増田ら,2018a;増田ら,2018b、杉山ら,2019、江角ら,2020、津野崎ら,2020)あった。質的研究4件のうち、3件(川本ら,2015、里光ら,2019、杉山ら,2020)はインタビュー法、1件(酒井ら,2015)は参加観察法を用いていた。5件の量的研究のうち、2件(杉山ら,2019、江角ら,2020)は質問紙調査を行っており、3件(村田ら,2017、増田ら,2018a;増田ら,2018b、津野崎ら,2020)はカルテ等から得られたデータを後方視的に検討していた。

3. 研究対象

5件では、試行事業修了生あるいは当該研修修了生といった、当事者を対象としたインタビュー(川本ら,2015、里光ら,2019、杉山ら,2020)や参加観察(酒井ら,2015)、質問紙(杉山ら,2019)による調査を行っていた。1件(江角ら,2020)では、当該研修修了生が所属する施設管理者、および当該研修修了生と協働している医師を対象とし、質問紙調査を行っていた。残る3件中2件(村田ら,2017、増田ら,2018a;増田ら,2018b)では、試行事業修了生あるいは当該研修修了生が実施した特定行為(末梢留置型中心静脈注射用カテーテルの挿入)に関するデータを対象としていた。その他1件(津野崎ら,2020)では、当該研修修了生配置前後に外来治療センターを利用した患者のデータを対象としていた。

4. 研究結果

1) 活動の実態を明らかにすることを目的とした研究

試行事業修了生あるいは当該研修修了生の活動の実態を明らかにすることを目的とした4件(川本ら,2015、酒井ら,2015、杉山ら,2019、杉山ら,2020)の結果を述べる。

川本ら(2015)は、試行事業修了生(文献内では「特定看護師」と表記)が認知しているチーム医療の中での役割行動と、他職種からの役割期待について明らかにすることを目的に、試行事業修了生を対象にインタ

ビューを行った。その結果、試行事業修了生が、自身の役割行動を【チーム医療の中でのコーディネーター】、【特定看護師としての医療の実践】、【看護師に対する教育】等と認識していることが明らかになった。

酒井ら(2015)は、試行事業修了生(文献内では「特定行為を実施する皮膚・排泄ケア認定看護師」と表記)が、業務の中で、特定行為の安全をどのように確保し、チーム医療へどのように関与しているのかを明らかにすることを目的に、試行事業修了生を対象に参加観察を行った。その結果、試行事業修了生が、≪WOCN(皮膚・排泄ケア認定看護師)として培ってきた創傷管理技術と調整力を基盤とした、低侵襲で安全・安楽な特定行為の実践≫をしていることが明らかになった。なお、試行事業修了生としての活動を行うにあたっては、皮膚・排泄ケア認定看護師としての豊富な実践経験が重要な要素であると考察がなされていた。

杉山ら(2019)は、当該研修修了生の活動の実態を明らかにすることを目的に、当該研修修了生を対象に質問紙調査を行い、28人(回収率記載なし)から回答を得た。その結果、特定行為を実施する頻度が週4日以上ある者が16人(57.1%)であったこと、当該研修の活用に関する自由回答は、「医師の不在時または医師と共に特定行為を実施する」、「アセスメントや患者への援助に活用する」、「看護師や研修医等への指導に活用する」、「医師-看護師間の調整へ活用する」の4つに分類されたことが明らかになった。

杉山ら(2020)は、当該研修修了生の活動の詳細を明らかにすることを目的に、当該研修修了生を対象にグループインタビューを行い、次の6つのテーマを生成した：【日々の経験を活かして役割を模索する】、【看護師とは異なる立ち位置で診療を補助する】、【チームの一員として看護を実践する】、【特定行為を単独で実施する】、【医師の指導や医師との連携で自分のアセスメント力を向上させる】、【高度実践看護師として看護ケアを行う】。これら6つのテーマのうち、【日々の経験を活かして役割を模索する】、【看護師とは異なる立ち位置で診療を補助する】の2つは、修士課程で当該研修を受講し、診療部に所属する対象者に特化したものであった。【チームの一員として看護を実践する】というテーマは、認定看護師として

の活動経験を有する対象者に特化したものであった。残る3つのテーマは、全対象者に共通のものであった。これらの結果を受け、著者らは、認定看護師である当該研修修了生の活動について、「認定看護師として特定の領域を基盤とし、その実践の延長として特定行為を実施していた」と述べていた。さらに、看護部に所属する認定看護師である当該研修修了生と、診療部に所属する当該研修修了生とでは、活動内容が異なることが示唆されたと言及していた。

2) 活動の評価を目的とした研究

試行事業修了生あるいは当該研修修了生の活動の評価を行うことを目的とした5件(村田ら,2017、増田ら,2018a;増田ら,2018b、里光ら,2019、江角ら,2020、津野崎ら,2020)の結果を述べる。

村田ら(2017)は、試行事業修了生(文献内では「診療看護師」と表記)が挿入・管理した末梢留置型中心静脈注射用カテーテル281例について、安全性を含め成績を検討することを目的に、後方視的に検討を行った。その結果、合併症が発症したのは17例(6%)であり、いずれも重篤な合併症ではなかったことが明らかになった。なお、本研究は、著者らが所属する施設の症例のみを対象とした単施設研究であった。

増田ら(2018a;2018b)は、試行事業修了生(文献内では「診療看護師」と表記)が挿入した末梢留置型中心静脈注射用カテーテル156例について、留置後の有害事象等の実態を明らかにすることを目的に、後方視的に検討を行った。その結果、治療終了まで至らずに抜去となったものが47例(30.2%)あり、その理由は、感染および感染疑いが23例(14.7%)、カテーテル血栓閉塞が9例(5.8%)等であったことが明らかになった。なお、本研究も、著者らが所属する施設の症例のみを対象とした単施設研究であった。

里光ら(2019)は、当該研修修了生(文献内では「特定行為看護師」と表記)の気管カニューレの交換の成果を概観することを目的に、当該研修修了生を対象にインタビューを行った。その結果、当該研修修了生が気管カニューレの交換を行うことによる成果として、次の7つのカテゴリーが抽出された:【カニューレ閉塞の回避へ】、【手に伝わる感覚を掴み確実なカニューレ交換】、【呼吸状態のトータルな観察・判断】、

【観察に基づき継続される適切な看護ケア】、【医師との連携強化】、【看護師との連携強化】、【患者・家族からの信頼獲得】。

江角ら(2020)は、当該研修修了生の活動による影響を明らかにすることを目的に、当該研修修了生が所属する施設管理者および当該研修修了生と協働している医師を対象に質問紙調査を行い、施設管理者135人(回収率52.5%)、医師110人(回収率31.2%)から回答を得た。なお、調査項目は自由記載で回答を求めるものが多かった。それら自由記載の内容を分析した結果、施設管理者および医師が共通して捉えている当該研修修了生の活用による患者および家族への影響として、「患者の苦痛・負担の軽減と安心感の高まり」、「修了者の説明や相談対応による患者・家族の病気や治療の理解促進」等が抽出された。医師への影響としては、「特定行為に関わる医師の業務量の減少」、「多重業務および患者への早期対応による医師の負担軽減」、「看護師からの診断や治療に必要な情報について報告への信頼の高まり」等が抽出された。

津野崎ら(2020)は、外来治療センター利用者記録をもとに、当該研修修了生(文献内では「診療看護師」と表記)を外来治療センターに配属することによる効果の検討を目的に、配属前後の比較を行った。その結果、外来治療センターの1日あたりの平均利用件数は有意に増加していたものの、診察待ちで利用する患者の滞在時間は短縮したことが明らかになった。

IV. 考察

分析対象とした9文献は、試行事業修了生あるいは当該研修修了生の活動の実態を明らかにすることを目的とした研究と、活動の評価を行うことを目的とした研究に大別できた。以下では、当該研修制度をめぐって行われてきた議論を踏まえながら、今後、当該研修修了生の活動や成果に関する研究を行うにあたっての示唆を得るという視点から考察を行う。

1. 研究対象者の選定における課題

川本ら(2015)、村田ら(2017)、増田ら(2018a;

2018b) および津野崎ら (2020) は、大学院修士課程で試行事業における研修、あるいは当該研修を修了し、日本NP教育大学院協議会から認定を受けた者を対象に調査を実施している。当該研修を行う施設は、指定研修機関として厚生労働省から指定を受ける必要があり、「1又は2以上の特定行為区分に係る特定行為研修を行う学校、病院その他の者であって、厚生労働大臣が指定するもの(厚生労働省,2020)」と定められている。2021年2月時点で、指定研修機関は272か所あり、うち14施設が大学院である(厚生労働省,2021b)。その中の一つの大学院のカリキュラムをみると、約50単位以上を履修することが要件として定められている(大分県立看護科学大学)。

当該研修は、共通科目と区分別科目から構成される。共通科目は「全ての特定行為区分に共通するものの向上を図るための研修(厚生労働省,2020)」であり、区分別科目は「特定行為区分ごとに異なるものの向上を図るための研修(厚生労働省,2020)」である。したがって、当該研修の受講生は、特定行為である21区分38行為すべての研修を受ける必要はなく、全員が履修するのは共通科目の250時間(厚生労働省,2020)のみである。そして、例えば「呼吸器(気道確保に係るもの)関連」の特定行為区分を履修する場合は、共通科目の250時間に加え、9時間と実習時間が追加される。当該研修はこのような仕組みであるため、当該研修修了生によって習得している内容、当該研修を受けた時間数は異なるが、大学院修士課程で当該研修を受けた者は、当該研修で定められている内容や時間数を大きく上回る学習をしていることが予想される。したがって、大学院修士課程で当該研修を受講した当該研修修了生を対象に調査を行った場合、当該研修以外の要素が影響すると考える。

また、酒井ら(2015)と杉山ら(2020)の研究では、対象者が認定看護師であること、あるいは、対象者の中に認定看護師が含まれることが明記されていた。これらの研究では、試行事業修了生あるいは当該研修修了生が臨床現場で活動する際には、皮膚・排泄ケア認定看護師であれば創傷管理技術といったように、その個人がもともと有する能力が大きく影響していると考察がなされていた。これより、認定看護師等の活動経験を有する当該研修修了生の活動には、当該研修で習得した知識や技術以外の要素が影響するため、当該研修そのものの意義の検討

は困難であることが示唆される。

杉森ら(2016)は、「あらゆる学習は、それを実現させるための外的条件と、学習者をもつレディネスによって成立する」と述べている。酒井ら(2015)と杉山ら(2020)の研究では、対象者のもつレディネスが結果に影響を与えており、川本ら(2015)、村田ら(2017)、増田ら(2018a; 2018b)、および津野崎ら(2020)の研究では、対象者の受講した研修の条件の特殊性が、結果に影響した可能性がある。したがって、当該研修修了生の活動の実態や成果を明らかにすることを目的に調査を行うに際しては、これらの点を考慮した対象者の選定が必要と考える。

2. 当該研修修了生の活動の評価の困難さと課題

1) 看護師の活動を評価することの困難さ

村田ら(2017)、増田ら(2018a; 2018b)、および里光ら(2019)は、試行事業修了生あるいは当該研修修了生が実施した特定行為(末梢留置型中心静脈注射用カテーテルの挿入、気管カニューレの交換)の安全性など、その実践を評価することを目的に研究を行っている。津野崎ら(2020)の研究では、当該研修修了生を配置することによる効果の評価を目的としている。このように、新たに始まった制度における研修を修了したり、資格を取得した者の活動を評価する試みは従来から行われているが、その困難さも指摘されている。

例えば、1994年に発足した専門看護師制度がある。2021年3月現在、2,744人の専門看護師が登録されているが(日本看護協会,2021)、「専門看護師による看護実践の効果検証は、まだ十分なエビデンスとして得られていない。殆どが実践報告や事例報告に留まっている(小松,2014)」現状がある。菅田(2004)は、「専門看護師の実践は非常に多様」であり、「実践とアウトカムの関係が複雑で、多数のそして感知できない攪乱因子が存在する」と述べている。ただし、この記述に先立って、「看護師の活動に全般的に言えることであるが(菅田,2004)」と前置きをしており、専門看護師に限らず、看護師の活動を評価することの困難さにも言及している。

2) 看護ケアの視点からの評価の必要性

医療の質評価は、Donabedian (1980/2007) が提唱した考え方が広く知られている。それは、構造 (structure)、過程 (process)、結果 (outcome) の3側面から評価を行うものである。日本看護質評価改善機構が公表する「看護ケアの質評価・改善システムマニュアル (2017)」をみると、構造は「ケアの提供の前提となるようなシステム、人の条件、設備等」、過程は「ケア提供が実際にどのような過程を踏んで行われているか」、結果は「ケアの提供の結果、患者にどのようなことが起こったか」と説明がなされている。村田ら (2017) と増田ら (2018a; 2018b) の研究は、末梢留置型中心静脈注射用カテーテルの挿入管理における合併症の発生といった、結果に焦点を当てているといえる。

ただし、当該研修制度をめぐっては、特定行為を実施することが看護師の役割拡大と期待の聲がある一方で、特定行為の実施により、いま以上に診療の補助業務へ偏重するのではないかといった懸念が示されていた (阿保, 2015)。そのため、例えば末梢留置型中心静脈注射用カテーテルの挿入について評価するに際しては、末梢留置型中心静脈注射用カテーテル挿入の過程が患者にとって「安全で安楽、自然の治癒力を高める (川嶋, 2015)」ものであったかといったような、看護ケアの視点からの分析が必要と考える。

3) 活動の質に影響を及ぼす要素

Donabedian (1980/2007) は、医療の質の定義を行うに際して、医療者の「親身さ」と「能力」について言及しており、両者は「個々の患者のニーズ、期待、好みを考慮し、細かく個別対応させて医学知識を適用するための必要条件であり、お互いに関連している」と述べている。里光ら (2019) は、当該研修修了生自身が気管カニューレの交換を行った成果の一つとして、【患者・家族からの信頼獲得】というカテゴリーを導き出している。ただし、これには、気管カニューレの交換という行為自体への患者・家族からの評価だけでなく、当該研修修了生の患者・家族への普段からの関わりやコミュニケーション等も影響している可能性がある。

当該研修では、特定行為の実践のみならず、医療

面接の理論や演習、医療倫理などが共通科目に位置づけられており、これらを習得することで、患者・家族への関わり方が変化することはあり得ると考える。そのため、当該研修修了生の活動の内容を検討するに際しては、当該研修で習得した知識や技術がその活動を行うにあたってどのように発揮されているのかという視点が必要と考える。

V. 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界は、当該研修制度が始まって約5年しか経過しておらず、分析対象の文献が9件にとどまったことである。さらに、9件で対象となっている試行事業修了生あるいは当該研修修了生の背景は様々であったが、分析対象文献の少なさから、そのことが当該研修修了生の活動や成果にどのような影響を与えているかについて、十分な検討が困難であった。

当該研修制度は開始後に見直しが行われ、2019年からは領域別に実施頻度が高い特定行為をパッケージ化した研修を行うことが可能になるなど、制度そのものが変化している。今後は、このような変化や当該研修修了生の多様さを考慮しながら、知見を積み重ねていく必要があると考える。

VI. 結論

本研究は、当該研修修了生の活動や成果に関する研究の動向と課題を明らかにすることを目的として、文献検討を行った。抽出した9文献を分析した結果、試行事業修了生あるいは当該研修修了生の活動の実態を明らかにすることを目的とした研究と、活動の評価を行うことを目的とした研究があった。

今後、当該研修制度や当該研修修了生についての研究を行うにあたっては、当該研修修了生個々のレディネスを考慮した研究デザインを検討すること、加えて、活動の評価に際しては、その活動の意義や意味を看護ケアの視点から検討することが必要と考えた。

COI 申告

申告基準を満たすものはなかった。

著者資格

KH は研究の着想、および研究デザインと実施、分析、論文執筆のすべてを行った。CH は研究プロセス全体への助言を行った。すべての著者は最終原稿を確認し、承認した。

付記

本研究は、第3回神戸看護学会学術集会で発表した内容を大幅に加筆、修正したものである。

文献

阿保順子 (2015) : 看護師は小さい医師になろうとしているのか : 「特定行為に係る看護師の研修制度」という愚策. 精神医療, 第4次 (79), 88-94.

Donabedian, A. (1980), 東尚弘訳 (2007) : 医療の質の定義と評価方法, 健康医療評価研究機構. (原著名: Explorations in Quality Assessment and Monitoring, Volume I The Definition of Quality and Approaches to Its Assessment, American College of Healthcare Executives)

江角伸吾, 関山友子, 八木街子, 他 (2020) : 特定行為研修修了者の活動による影響 施設管理者および協働する医師の捉え方より. 日本ルーラルナース学会誌, 15, 1-16.

菅田勝也 (2004) : 医療施設における専門看護師導入の影響. 医療, 58(5), 300-302.

看護未来塾世話人会 (2018) : 看護師の特定行為研修制度は誰のための、何のためのものか. 検索月日 2021 年 3 月 27 日, https://2630d504-f80c-468d-bf1a-8eb9de3e5b56.filesusr.com/ugd/7c3b4b_b69c4a83b73c42758b81ecbd8f284de0.pdf.

川本寿代, 山田巧 (2015) : 「特定看護師 (仮称) 業務試行事業」により養成された看護師が認知しているチーム医療の中での役割行動および他職種からの役割期待. 国立病院看護研究学会誌, 11(1), 49-57.

川嶋みどり (2015) : いのちとくらしと平和を守る専門職としての看護だから. 医療労働, 583, 10-17.

小松浩子 (2014) : 我が国における高度実践看護師 (専門看護師) 制度・教育の変遷と課題. 学術の動向,

19(9), 54-59.

厚生労働省 (2020) : 保健師助産師看護師法第 37 条の 2 第 2 項第 1 号に規定する特定行為及び同項第 4 号に規定する特定行為研修に関する省令の施行等について. 検索月日 2021 年 3 月 27 日, <https://www.mhlw.go.jp/content/10800000/000690153.pdf>.

厚生労働省 (2021a) : 【特定行為に係る看護師の研修制度】研修を修了した看護師について. 検索月日 2021 年 3 月 27 日, <https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000194945.html>.

厚生労働省 (2021b) : 看護師の特定行為研修を行う指定研修機関. 検索月日 2021 年 3 月 27 日, https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000194491_00009.html.

増田陽介, 今井崇 (2018a) : 診療看護師が施行する末梢留置型中心静脈カテーテル (PICC) の実態調査. 北海道看護研究学会集録, 平成 30 年度, 35-37.

増田陽介, 今井崇 (2018b) : 診療看護師が施行する末梢留置型中心静脈カテーテル (PICC) の実態調査. Best nurse, 29(10), 70-68.

村田美幸, 佐藤慶吾, 田中俊行, 他 (2017) : 診療看護師による PICC 挿入と管理の成績 当院における PICC 281 例の検討. Medical Nutritionist of PEN Leaders, 1(1), 54-62.

日本看護系学会協議会 (2011) : 高度実践看護師としての特定看護師 (仮称) の能力ーケアとケアの融合によりチーム医療の推進をめざすー. 検索月日 2021 年 3 月 27 日, http://www.jana-office.com/statement/pdf/news20110713_1.pdf.

日本看護協会 (2014) : 協会ニュース号外.

日本看護協会 (2019) : タスク・シフティングに関するヒアリング. 検索月日 2021 年 3 月 27 日, https://www.nurse.or.jp/nursing/np_system/pdf/20190726.pdf.

日本看護協会 (2021) : 分業別都道府県別登録者数一覧. 検索月日 2021 年 3 月 29 日, <http://nintei.nurse.or.jp/nursing/qualification/cns>.

日本看護質評価改善機構 (2017) : 看護ケアの質評価・改善システムマニュアル. 検索月日 2021 年 3 月 27 日, http://nursing-qi.com/common/pdf/manual_2017.pdf.

日本 NP 教育大学院協議会 : 一般社団法人 日本 NP

教育大学院協議会と日本 NP 学会について. 検索月日 2021 年 3 月 27 日, <https://www.jonpf.jp/about/index.html>.

日本 NP 教育大学院協議会 (2019): 日本 NP 教育大学院協議会の NP 教育課程認定規程に関する細則. 検索月日 2021 年 3 月 27 日, https://www.jonpf.jp/files/SpcDocumentsDetail/2/SpcDocumentsDetail_2680_file.pdf.

野村陽子 (2017): 業務拡大した介護福祉士及び看護師の政策決定に影響した要因. 京都橘大学研究紀要, 43, 157-169.

大分県立看護科学大学: NP コース カリキュラムと修了要件. 検索月日 2021 年 3 月 27 日, http://www.oita-nhs.ac.jp/graduate/np_course.html#curriculum.

酒井透江, 横野友江, 溝上祐子, 他 (2015): 特定行為を実施する皮膚・排泄ケア認定看護師による安全の確保に関する行動の特徴. 日本創傷・オストミー・失禁管理学会誌, 19(3), 309-318.

里光やよい, 村上礼子 (2019): 「特定行為に係る看護師」による気管カニューレの交換にみる成果. 医学教育, 50(5), 489-493.

杉森みど里, 舟島なをみ (2016): 看護教育学 第 6 版. 東京: 医学書院.

杉山文乃, 井上智子, 藤澤雄太 (2019): 国立高度医療研究センター／国立病院機構に勤務する特定行為研修修了者の活動実態とキャリア形成に関する研究. 国立病院看護研究学会誌, 15(1), 35-41.

杉山文乃, 井上智子, 梅田亜矢 (2020): 国立高度専門医療研究センターおよび国立病院機構における特定行為研修修了者の活動実態と育成に関する研究. 国立看護大学校研究紀要, 19(1), 54-60.

津野崎絹代, 安達杏葉, 和泉泰衛 (2020): 外来治療センターにおける診療看護師介入による診療の効率化: 前後比較研究. 日本プライマリ・ケア連合学会誌, 43(4), 123-128.